

# Pickbourn (1789) と進行形の制限

樋口 万里子

## はじめに

(1) のような進行形は、現代標準英語では基本的に容認されないが、中世から19世紀初頭までの小説や書簡、そして現代でも方言などでは見受けられる。

(1) \*He is knowing it.

それどころか、19世紀半ば位までの英文法書には、I am loving などが、進行形の例文として挙げられている場合が少なくない。現代標準英語の進行形に aspectual な制限がかかるのは一体何故なのだろうか。本稿は、この謎を解く鍵の一つが、標準英語が仕上がっていく近代後期の規範文法に存在する可能性を追う。

議論を始める前に、(1) のタイプの進行形の輪郭を明らかにしておきたい。極めて稀なケースであるにしても、know という動詞自体は、現代標準英語の進行形に全く生起しないという訳ではない。例えば Osselton (1980: 454) は、(2a) の know は「知らない状態」から「知っている状態」への変化を表していると述べる。

(2a) He had to remember that this man, helpless, an object on the operating table, was **knowing** the meaning of loneliness: ultimate loneliness, not too far from the loneliness of dying.

(Snow, C.P. *In Their Wisdom* (1977) Penguin, p. 317, 太字は筆者)

Osselton は、この場合 was knowing の代わりに knew を使うと、目的語である「孤独の意味」を、主語の人物が、手術台に乗る以前のいつとは特定されないある時点から既に知っていたことを表すことになる、と続けている。(2a) を引用している Hirtle & Bégin (1991: 122) も Osselton の説明に賛同し、(2b) のような、微妙ながらも何らかの変化過程を喚起する、同類の進行形の例を多数挙げている。

(2b) When a baby is enjoying the feeling of being touched, it is **knowing** that it is human. (Hirtle & Bégin: 1991: 122, from an interview on TV: *Man Alive*, CBC January 13, 1975, 太字は筆者)

大きく括れば、これらは、移動などの「変化・動き」が認識され一時的状態を表すと説明される、He is living in Tokyo などと同じ範疇に入る。I guess と I'm guessing の違いは極微少だが、前者は Do you like sushi? への返答としてあり得るのに、後者は使えない。それも、後者が「今ちょっと考えてみている」という頭の中の動きを意味するからである。後者はやはり (2a, b) と同類だと言えるだろう。現代標準英語の進行形は、所謂「状態動詞」が使われていても、基本的に何らかの形で「変化や動き」を伴う<sup>1</sup>。

ここで議論対象とするのは、これらとは違い、「現代標準英語では非文とされる He's knowing it の類い」の方で、「変化が意識されない状態」を表している進行形である。このタイプの進行形を、本稿では stative progressive と呼ぶことにする。

Stative progressive は、英国ではアイルランド・スコットランドなどの北西部、

<sup>1</sup> 同様の She's loving every minute of it 等のイディオム的なものや We are hearing English being spoken など見聞きする。

米国では南部など、様々な英語方言で使われていることが知られている。時折、方言に愛着を持ち大切にしている作家の小説などでは、(3a) や (3b) のような進行形に遭遇する。

- (3a) “Can you play that tune, Colin?” Mrs. Wolfingham asked. “I wouldn’t be knowing that tune, Mrs. Wolfingham,” the young piper answered.

(1949: 180, Compton Mackenzie, *Hunting the Fairies*)

- (3b) “Where’s Robert?” he asked. “I ain’t a-knowing.” Her lips were puffed out, her voice sullen. “He ain’t never tell me where he goes.” “When did he go?” “This e’ening. Right after you went off. Didn’t he come to the schoolhouse?”

(1953: 257, William A. Owens, *Walking on Borrowed Land*)

これらの進行形は、英語の多様性を示す例であって、奇異に感じる英語母国語話者が多いとしても、これらの意味するところは理解できる<sup>2</sup>。認知的にあり得ない表現ではないということになる。

また、19世紀の初め頃までは、stative progressive は使われていた形跡がある。その頃書かれた Jane Austen の小説には、地の文に (3c) のような例が少なからず見つかる。

- (3c) Mrs. Elton was wanting notice, which nobody had inclination to pay, and she was herself in a worry of spirits which would have made her prefer being

<sup>2</sup> 例えば、*The Legend of 1900* という映画のラストシーンに、“You’ll be needing it.” という台詞が出てくるが、これは、英語の多様性がおり混ざった、You’ll need it では表せない温もりを残す味わいを醸し出している。こういった例は現代でも頻繁に使われており、stative progressive とそうでない progressive は、他の様々な対立概念と同じ様に、実は連続的で階調をなしているとみることができだろう。

silent. (1815, Jane Austen: *Emma*, 板東 (2008) より)

こういった例に、小説家の何らかの意図や、単純形とは異なるニュアンスを読み取る事は可能なのかもしれない。だが、少なくともこの場合は、何らかの変化が意識される例とは言えないだろう。意図的なものとは言えそうにない *stative progressive* もある。John Keats の書簡に出てくる (3d) のような場合である。

(3d) Do not live as if I was not existing – Do not forget me.

(1820, John Keats, *Letters*, from Beal: 2004: 79)

更に興味深いのは、18世紀において最も権威ある英文法書の一つとされ、標準英語の形成に関わっていると目されている Lowth (1762: 56) に、現在進行形の唯一の例文として、*I am loving* が登場することだ。活版印刷の開始から1800年までの文法を中心とした英語に関する書をほぼ全てリスト化している Alston (1974) や、19世紀の英文法書を網羅している Görlach (1998: 361) を参照すると、Lowth (1762) は1800年までの38年間の間に42回、その後の1811年までに少なくとも12回、改訂版を含め増版されている。*I am loving* を進行形の例として使っているのは Lowth だけではない。全く同じ例が、少し調べただけでも、Webster (1790: 38, 初版は1784年) から Burr (1797: 99)、Lennie (1810: 39)、Bullions (1845: 38, 初版は1834年)、Swett (1844: 58, Görlach によれば、初版は1843年)、Weld (1849: 100) などを含み、Fowler (1851: 39) に至るまで、いずれも名の知れた文法書で使われている。19世紀も後半の Whitney (1886: 220) でさえ、*I am loving* に加えて *he was seeming happy* を挙げている。

文法書や文法研究文献の例文として、実際には生起しない、文法家が創作したものが挙げられている場合は、現代でもままたることはある。この時代の

英文法書には、例えば、英語には存在しない形式範疇が、ラテン語やフランス語の形式範疇に相当するものとして並んでいることがある。Wischer (2003: 165) は、I am loving は実際には使われることがなかつただろうと言う。

しかし、Tieken-Boon van Ostade (2006: 551) は、中流階級出の Lowth が著した文法は、上層階級の人々の（あるいは彼がそのように認識した）言葉使いに則っていると述べる。また、Görlach (2003) も、Lowth は実際に使われていた言葉を捉えていたと言っている。文法書に挙がる例文というのは、基本的には当該範疇を解り易くする為の典型例であるだろう。Lowth が、自分は I am loving を使う事も見聞きした事もないのに、上流階級の人々の間で使われていると誤認した可能性はあるにしても、自分の直観に照らして甚だしく不適切な文を例として挙げるということはやや考えにくい。後の文法家達が単に Lowth に追従して I am loving を例として挙げているとしても、実際に使われている (3c, d) の例を重ね合わせると、19世紀初期までは、stative progressive は現代の英語で程に容認不可という訳ではなかつた可能性も高いように思えてくる。

現代の英語を母国語とする人々にも、進行形に、所謂「状態動詞」が使われているだけで拒否反応を示す人々、その状態動詞に変化や動き、臨場感を読み込んだりその意味で使ったりしている人々、そして標準英語ではないとしても、stative progressive を使う人々がいる。これをどう理解すべきかを巡り、本稿では、James Pickbourn によって書かれ1789年に出版された英語動詞の専門書に於ける、stative progressive を禁じた規則を中心に据えて議論を展開する。まず一節でその独創性に触れ、二節で近代後期英文法書の単純形・進行形に関する記述、三節で、近代後期社会における英文法書の役割を概観する。その上で、四節で禁則の記述特徴、五節で禁則と英語の標準化との関係、六節で規範文法の言語使用への影響、最後に七節で進行形の現在分詞の特異性、を考察する。そうすれば、現代標準英語の進行形には何故 aspectual な制限があるのかについて

て、見えてくるものがあるように思われる。

## 1. Pickbourn (1789) のオリジナリティ

進行形の制限に初めて言及したのは、おそらく Pickbourn ではないかということが考えられる。彼は、1789年に発刊された自著、*A Dissertation on the English Verb* で(4)のように言う。

- (4) We do not say, *I am loving, I am fearing, I am hating, I am approving, I am knowing*; but we say, *I love, I fear, I hate, I approve, I know &c.*”

(Pickbourn: 1789: 81-82)

今では殊更に記すべくもないような文法説明だが、このような規範は、それ以前の、少なくとも主要な英文法書には見あたらない。これは、彼のオリジナルである可能性が非常に高い。というのも、Pickbourn (1789) の序文は、次のようなあるエピソードで始まっているからである。彼は、「15年程前ヨーロッパ本土に滞在していた時、あるフランス人に、『ヨーロッパ人は一般に英語の *I loved, I did love, I have loved, and I was loving* を同義と捉えているが、古代語であれ現代語であれ、別の時制形式が全く同じ事を表すとは考えられないので、違いを説明して欲しい』と求められた。しかし、その場では答えに窮し、その後、Greenwood や Lowth、Priestly、Harris's Hermes など、(18世紀の)名だたる文法書を紐解いてみたが、参考になるものが見つからず落胆した」と書いている。そして、彼なりの説明を模索した結果が、当該著書である。(4)の規範も、上記四つの動詞形式説明を敷衍したものである。

このエピソードで注目しておきたいのは、当時の欧州人が、*I loved* と *I was loving* を同義表現として認識しているという点と、Pickbourn 自身もその場では

I was loving を即座に誤りとは指摘しなかったことである。これは、外国人からの客観的観察や Pickbourn の言語直観において、進行形の制限が顕在化していなかった可能性を示すように思われる。実際には微妙に使い分けていても、違いを説明することが難しい類義の語句は多いにせよ、明らかに非文だと感じる文であれば、言下にそれは使わないと言うのではないだろうか。序文を締めくくるにあたって、Pickbourn は、英語の真実と名誉の為に探求を始めたと言う。彼は英語の根幹である四つの動詞形式の意味や用法が曖昧なままであれば、母国語の名折れと考えたかもしれない。そういった動機で考察し続け、四形式のあり方を見定めたのであれば、stative progressive の制限は、彼の単純形と進行形の相違説明から派生した論理的産物であったかもしれない。この当時、I was loving が人々の言語直観に歴然と反するものではなかった可能性が、このエピソードから浮上する。

前述の、高名な Lowth (1762) は、I'm loving に加え I was loving、I shall be loving を進行形の例文として挙げている。Pickbourn はそこに異論を唱え、頁番号を示しつつ、これら三つの例文を削除するか、動詞を別のものに替えるべきだと断言している。自らの単純形と進行形の用法の弁別を踏まえて、進行形は continued energy や affection of the mind を表す動詞を取らない (1789: 27, 81)、と (今日的な言い方をすれば aspect に関わる) 原則を打ち出し、その上で、自分の二形式の区別が正しければ、と断りを入れ、(4) の禁則を導いている。現代の文法記述に通じるものだ。Lowth (1762) が、冠詞・名詞・代名詞から間投詞までの九つの品詞を含む文法全体を概説しているのに対し、Pickbourn (1789) は、動詞の四形式に焦点を当てた彼の渾身の論考である。Auer (2008: 59) は、Pickbourn を動詞の専門家として挙げている。Pickbourn (1789) の序文からすれば、筆者の進行形の制限に関する規範記述は、15年の歳月をかけて動詞を追求した、当時は比類のない、彼自身の独創的な見解の一端であったように思わ

れる。

Alston (1974) を参照する限りでは、Pickbourn に他著はなく、当該著は、再版された形跡もないものの、ドイツ語に翌年翻訳され、発刊年または翌年に4つの書評誌で取り上げられている<sup>3</sup>。その一つ、*Critical review* (1790, 70, pp.148-151) は、進行形には触れていないが、同書には全体に正当な分析に基づいた支持できる明察が綴られていると結ぶ。また、Alston (1974) には掲載されていないが有名な *The Analytical Review* (1790, Vol. VII, p. 61) では、(4) の禁則を含むパラグラフ全体が引用され、禁則そのものも明晰で洞察力に満ちたものと好評を博している。これは、Pickbourn の規則が斬新な知見であり、少なくとも一部では受容されたことを示しているだろう。

## 2. 近代後期英文法書に於ける単純形・進行形の扱いと進行形の制限

そもそも Pickbourn 前後の文法書では、進行形は、一般に現在分詞の項で、be 動詞に連なって単純形と同じような事を表す形として扱われていた<sup>4</sup>。それは前述の欧州人の受けとめ方と一致してしており、これが当時の一般的な使われ方を反映している可能性は低くない。I run と I am running は等しいなどという記

<sup>3</sup> Alston (1974) volume iii の Miscellaneous の章の88頁ではこのドイツ語版の出版年は1790年となっているが、volume ii、他言語で書かれた英文法書の章、の104頁では1793年となっており、二版存在した可能性がある。

<sup>4</sup> Wischer (2003) に依れば、17世紀では、Miege (1688) を除けば、そもそも進行形に触れている文法書自体が存在せず、その Miege は、現在進行形を、単純現在形以外に現在を表す風変わりなもう一つの形として取り上げている。18世紀になると、一部の文法書に進行形に関する記述が散見され始めるが、多くの場合、単純形と進行形はやはり variants の扱いである。例えば、Greenwood (1711:163) は、I am burning はつまり I burn であるとし、John Ward (1758: 98) も、I write と I am writing は両者共今起きていること (an action as now doing) を意味すると述べる。Buchanan (1762: 125) は単純形と進行形を beautiful variants と説明する。Devis (1801: 56, 初版は1775年刊行) は、I read の代わりに I am reading と言えると書いている。19世紀に入っても尚、Cobbett (1818: 135) が He works と He is working は同意義だと記しており、I run と I am running は等しいという記述があるのは、19世紀も半ばにさしかかる頃の Barrett (1837: 65) である。

述もある。二形式を variants として説明する際の例文には、動作動詞が使われている場合が多いが、William Ward (1765: 196) に見られるように、I am having は I have を二語で表す形式と説明している場合もある。これも Lowth の I am loving と同じく、Pickbourn の原則と相容れないものと見る事ができるだろう。近代初期では、今で言えば進行形でしか言えないことを単純形で表すのが普通であったし、特に書き言葉や表立った場合ではその傾向は強かった。その後進行形の頻度は躍進し、formality の差も薄れたので、二形式が曖昧に同じように使える時期があったとしても、不自然ではない。単純形と進行形が variants では、(4) のような禁則が意識に上ることはないだろう。

但し、単純形と進行形が区別されることが Pickbourn (1789) 以前に全く無かった訳ではない。過去進行形の使われ方の特徴については、それまでも言及があった。既に Miede (1688: 70) が I was speaking of you, when you came in などの例を挙げ、「A Thing that was a doing, but interrupted upon some incident について話す場合に I was と現在分詞を使う」と観察している。Cobbet (1818: 135) も、I was working は I worked と同じ意味を表すという叙述の後に、前者は I was working when he came などのような場合に使われると加えている。Lowth はこの二形式を indefinite/definite 等という異なる用語で呼んでいる<sup>5</sup>。Pickbourn (1789) の前年に発刊された Brittain (1788) では、(5) のような単純形と進行形を対照した言及が見られる。

- (5) Present Tense: Our present Tense, simple, has commonly a sort of vague or habitual signification; as, He *goes* to Church. Whereas, to express the action now actually going on the compound is employed 'He is *going* to Church'; 'Lord save us, *we are perishing*.' Matt. 8. (But he is a going, is a low expression.)
- (Brittain: 1788: 99-100)

しかし、いずれの場合も、(4)の禁則とは繋がらない。前述したように Lowth は I am loving を例として挙げており、Miege や Brittain が使っている the action now actually going on という表現は、必ずしも進行形の説明だけに使われている訳ではない。John Ward (1758: 98) は、I write と I am writing は、どちらも an action as now doing を意味するとする。Burr (1797: 91) は、A merry Heart *maketh* a cheerful Countenance という例を挙げ、この現在単純形の *maketh* が an Action which is *now a performing*, and yet is *never done*, but may be *always a doing* を表せると述べる。また、Bullions (1845: 38) も Bidlake (1863: 23) も I love you などの現在形は what is going on at present (or now) を表すと言う。いずれにせよ、二形式の輪郭は曖昧である。

これらに対して、Pickbourn (1789: 19-24, 26-27) の 8 頁に及ぶ単純形と進行形に関する記述説明は、はるかに明解である。詳細は省き要点だけを列挙すると、最初の現在形とされている単純現在形については、(6a) のように記されている。

(6a) First, It is used to express general propositions, which are true at all times;

<sup>5</sup> Lowth (1762: 55-56) は、“But in discourse we have often occasion to speak of Time not only as Present, Past, and Future, at large and indeterminately, but also as such with some particular distinction and limitation; that is, as passing, or finished; as imperfect, or perfect.” と述べ、Indefinite, or Underdetermined, Time: Present の例として I love を、Definite, or Determined, Time: Present Imperfect の例として I am (now) loving を、Present Perfect の例として I have (now) loved を挙げている。また、Murray (1809: 102) は I teach の代わりに I am teaching と言えるとしながら、進行形は一般的な習慣や感情 (affection of the mind) を表すには適合しないと書いているので、彼の認識では、単純形は進行の意味も表せるが、それは動詞によるということだったのかもしれない。この affection of the mind という、Pickbourn と全く同じ表現が使われているところを見ると、Pickbourn の説明を単に部分的に取り入れた可能性もある。Murray は単純現在形の用法については Pickbourn を踏襲していると思われる説明 (1809: 80) を展開しているのに、進行形の説明や用法については触れておらず、affection of the mind を表す動詞の例を挙げていないのは、彼自身の感覚で不透明な部分があったからかもしれない。Murray の説明は曖昧である。いずれにせよ、当時の二形式の使われ方には、まだ渾沌とした部分があったことを示しているだろう。

as, two and two *make* four; the whole *exceeds* a part; the three angles of a triangle *equal* two right angles; virtue *promotes* happiness; vice *leads* to misery.

Secondly, It is employed to denote habits, or repeated actions; as, he *reads* well, but he writes badly; when he *walks out*, he *mediates*. In this sense we sometimes apply it even to persons long since deceased; as, Ovid *describes* the tender passions well ....

Thirdly, This tense preceded by words *when, before, after, till, as soon as* &c. is sometimes used to point out the relative time of a future action, *i.e.* to shew a relation, with respect to time, between two subsequent actions, one of which is always expressed in the future tense: as, when he *arrives*, he will hear the news; he will not hear the news till he *arrives*; ....

And, fourthly, in historical narrations, this tense is sometimes substituted for the preterite; as, he *fights* and *conquers, takes* an immense booty from his enemies, which he *divides* among his enemies, and *returns* home in triumph. ....

(Pickbourn: 1789: 20-24)

現在進行形は、三番目の現在形として捉えられ、(6b) のように説明されている。

- (6b) The third present tense, viz. *I am writing*, may properly be called the present imperfect. It is always definite; for it not only means an individual action, but confines the signification of the verb to the present instant, or now; and implies that the action has been begun, is now going on, but is not yet completed.
- (Pickbourn: 1789: 26-27)

It's 8 o'clock 等をどう扱うかは別として、ここまで踏み込んだ記述は、Pickbourn

以前には見当たらない。のみならず、(6a, b) は驚く程今日的でもある。例えば Mittwoch (1988) の進行形に関する洞察や主張とほぼ同様である。現在と異なるのは呼称だけで、それも Lowth のものに合わせたものと思われる<sup>6</sup>。

一方、Pickbourn 後の文法書には (6a, b) と酷似した記述が容易に見つかる。例えば、禁則が顕著に多い英文法書として Görlach (2003) や Sundby (2008: 111)、Tieken-Boon van Ostade (2011: 255) が挙げている、Knowles (1796: 22, 59) を見てみると、そこに記されている二形式の説明書きは、例文を含めて Pickbourn のものとほぼ同じである<sup>7</sup>。Murray (1809: 80) にも単純形に関しては同様の説明がある。Angus (1839: 38、初版は1825年) のものに至っては、(7a, b) の様に、Pickbourn の記述の主要部である (6a, b) を殆どそのまま丸写しし、例文の一部を省略化しただけといった格好となっている。

(7a) The Present is used,

*First*, To express general propositions, true at all times; as, “Two and two make four;” “Virtue *promotes* happiness;” “Vice *leads* to misery.”

*Secondly*, To denote habits or repeated actions; as, “When he *walks out*, he *meditates*.” In this sense, it sometimes applied to persons long since dead; ...

*Thirdly*, When preceded by *when, before, after, &c.*, it points out the relative time of a *future* action; as, “When he *arrives*, he will hear the news.”

*Fourthly*, In animated historical narrative, it is used for the *Passed* tense; as, “He  *fights and conquers, takes* an immense booty from his enemies, which he

<sup>6</sup> Bullions (1845: 38) では Progressive という呼称が用いられている。

<sup>7</sup> Knowles (1796) の初版は1785年に出され、タイトルは同じだが、それは僅か36頁の短く簡単なもので、二形式の用法には触れていない。1796年の第四版はそれが144頁の書となり遥かに充実したものになっており、この時期盛んに出版された他の文法書や Pickbourn の記述が反映されていると考えられる。

divides among his soldiers, and returns home in triumph.”

(Angus: 1839: 38)

(7b) THE TENSES CONTINUATELY

Imply, that the action is begun, going on but not yet completed; as, “*I am writing; I was writing; I have been writing.*”

(Angus: 1839: 41)

現在継続している現在を表す形として *I love* と *I am loving* を挙げている Bullions (1845: 38) でも、単純現在形に関する記述 (39-40) は、用法・用例の並べ方一つとっても Pickbourn のものとの類似性が非常に高い。少なくともこれらの文法書への Pickbourn (1789) の影響は、疑う余地がない。Tieken-Boon van Ostade (2008: 18) によれば、Lindlay Murray の *English Grammar* の第五版 (1799: 63) に、その前年出版の四版にはなかった Pickbourn についての言及が見られるとのことだ<sup>8</sup>。書評評価の高かった Pickbourn の動詞専門書は、少なくとも近代後期の英文法著述に、直接的であれ間接的であれ広く影響を及ぼした可能性は高い。

Stative progressive の制限の方についても同様だ。Knowles (1796) は、(8a) の様に記述しており、やはり例を含めて Pickbourn のものを簡略化したものとなっている。

(8a) Participle present, expressive of continued mental Affection, are not used after the Verb *to be*; as, *I fear*, not, *I am fearing*; *I love*, not, *I am loving*; *I know*, not, *I am knowing*.

(Knowles: 1796: 59)

<sup>8</sup> Tieken-Boon van Ostade (2008: 18) は、これは、彼の四版が書評で剽窃の汚名を着せられたからではないかとみている。第16版の Murray (1809) では Pickbourn への言及はないが、影響は垣間みられる。

Brown (1823) の説明も、(8b) の様に類似している。

(8b) Those verbs which, in their simple form, imply continuance, do not admit the compound form; thus we say, “I respect him;” but not “respecting him.”

(Brown: 1823: 69)

Angus (1839: 150) は The clock is standing や He is not at home, I’m thinking と  
いった、今では一時的な様や動きを表すものとして解釈可能な例を *Scotticisms*,  
*Vulgar Anglicisms* と題した章に挙げている。Butler (1879: 91、初版は1945年)  
は I am loving は not good English とし、Kerl (1868: 24) も love は進行形では使  
えないとしている。Bain (1863: 115) は I was supposing や He is not intending が  
best English usage に反すると言う。Reed and Kellogg (1880) は、進行形につい  
て (9) のようなやや曖昧な説明をしつつ、Pickbourn の禁則を踏襲している。

(9) **Remark.** — The progressive form denotes a continuance of the action or  
being; as, The birds *are singing*.

Verbs that in their simple form denote continuance — such as *love*, *respect*,  
*know* — should not be conjugated in the progressive form. We say I *love* the  
child — not, I *am loving* the child.

(1880: 216, Görlach (1998: 285) は、初版は1877? としている)

単純形、進行形の用法記述にしても、stative progressive の制限にしても、直接的にせよ間接的にせよ、Pickbourn (1789) の影響は小さくないように見える。

これまでのところで、19世紀初頭までの文法書には、I am loving を例文に挙げたり、単純形と進行形を同義形式と見なしたりするものがある一方で、二形

式を明確に分け *stative progressive* を禁じるものがあったことを概観した。同時に、進行形の制限は、Pickbourn (1789) が世に出るまでまだ多くの文法家達には意識されておらず、そこで初めて取り上げられた可能性があることも示唆した。どのようにして後者が前者を凌駕したのだろうか。次節ではその解を求めて、Pickbourn (1789) の時代の文法記述のありかたを、その社会背景と共に眺めてみたい。

### 3. 近代後期社会における英文法の役割

近代後期というのは、英文法書の新刊出版数が爆発的に増大した時代である。Alston (1974) を参照すると、1700年以前の英語で書かれた新刊英文法書の発刊数は15冊、1700年から1750の Ann Fisher (増版35回) までで、作者不明のものを含めて31冊、それが18世紀後半では200冊以上となり、その内1790年代は68冊である。それも、かなりの回数増版を重ねているものが少なくない。これが、19世紀の新刊文法書数となると、2000冊に近い事が Görlach (1998) のリストから解る。これらの多くも幾度となく再版されている。前節で挙げた文法書、その著者の他書の再版改訂回数も、特に目を引く。インターネットで調べると、Görlach のリストにはない版も多々存在する。これらが何部発行され市場に出回ったかは計り知れず、様々な人々の目に触れたことは間違いない。

こうした文法書の供給数の増加は、勿論需要を反映している。近代後期と言えば、産業革命により人口が急増し、教育も普及した時代でもあったが、社会言語学者の Beal (2004: 93) は、この時期を、経済基盤が土地から金銭へと移り英国社会が大きく変容し、社会的地位が低かった人々の地位向上が可能となった時代だったと特色付ける。中流階級の人々がより上流の社会へ食い込んで行くには、経済的・物質的豊かさのみならず、様々な教養と品格を備え、洗練された身のこなし方を獲得することが必要であった。Watts (1999: 42) はその中

核をなすのが、言語であったと論じている。即ち、社会階級の階段を上るには、‘polite’ society (上流階級の教養の高い人々の社会) で使われている上品な言葉使いを身につける事が必須だった。上流社会の人々の言葉は正しい英語とされ、それを習得することが、よりよい職に付き、社会で成功をおさめ、より豊かな生活をおくる手段として重要だった。英文法書は、地位向上を目指し、「正しい」英語を使える様になりたい人々の求めに応じ拡大した。

それは、近代後期英文法書の本文が、驚く程一様に、文法を「言葉を正しく使う術」と定義して始まっていることからもうかがえる。(10) に挙げるのは、そのほんの一部だ。

(10) Greenwood (1711): Grammar is the Art of Speaking rightly.

Lowth (1762): Grammar is the Art of rightly expressing our thoughts by Words.

Murray (1809): English Grammar is the art of speaking and writing the English language with propriety.

Brown (1823): English Grammar is the art of speaking, reading, and writing the English language correctly.

Bullions (1834): English Grammar is the art of speaking and writing the English Language with propriety.

Angus (1839): Grammar teaches us how to express our ideas correctly; and is either Universal or Particular. English Grammar, then, teaches to speak and write the English language correctly. (First Published in 1825)

Lennie (1866): English Grammar is the art of speaking and writing the English language with propriety. (First Published in 1810)

一見して、この時代の英文法というのは、明らかにその言語の母国語話者が自然に使っている言語のあり方を記述しているのではないことが解る。それは、英語という言語の範疇に入る言葉を既に母国語として使っている人々が、自分達の使う言葉を律し制御するための規範であり、術である。英文法書は、そういった規範や指針を授けるべく書かれたものでもあった。

一括りに英語と言っても、他の言語もそうであるように、人々が実際に使う言葉には、様々な環境により様々なバリエーションがあるのが自然であり、本来はどれが正当でどれが正当でないという性質のものではないだろう。しかし、Percy (2004: 153) は、近代後期の英文法は、様々な variants に正しい、正しくないというラベルを貼り、それぞれに教養のある人々の英語、そうでない人々の英語という概念と結びつけたと言う。地位向上を望む人々だけでなく、地位相応に教養を身につけたい人々も、こぞって正しい言葉使いを教授する英文法を求めたとも言う。Michael (1987: 328) には、Rothwell (1797: 139) からの、「学習者達は、他のどんな練習問題よりも誤り是正訓練を好み、それは英国でも米国でも同じであった」という引用がある。実際の英文法書を調べても、間違いの訂正記述に多大な頁を割いているものが顕著に多い。この頃の英文法書のタイトルは、一般的にうたい文句を長々と並べたものとなっているが、そこにも間違い是正事項が含まれている場合が多々ある<sup>9</sup>。また、Murray (1797) は、Introduction で、是正されるべき間違いと共に統語規則を繰り返し説明して教え込む事の必要性を力説している。Michael (1987: 325) は、近代後期の英語教育は、統語構造規則を暗記させるものだったと指摘している。近代英語後期は、既に英語を母国語とする人々が、自らの言葉の使い方が誤りかどうかに敏感で、

---

<sup>9</sup> 例えば、Knowles (1796) の表紙タイトル全文は、THE PRINCIPLES OF ENGLISH GRAMMAR: WITH CRITICAL REMARKS AND EXERCISES OF FALSE CONSTRUCTION. ADAPTED TO THE USE OF SCHOOLS, AND PRIVATE TUTERS. である。

誤用の指摘を望み、正しい英語を自らに刻み込んでいった時代だったようである。標準英語というのは、そうした中で固まっていったもののものである。

Beal (2004: 93) は、文法家達が、自分の書の売り上げの為に、名高い文章の達人達、小説家達ですら英文法書に頼らずには正しい英語を使えないと、人々の不安感をあおることさえあったという<sup>10</sup>。事実、Samuel Richardson (1689-1761) が、自分の英語への批判を受けて、自分の小説の英語を書き直したことがよく知られている。彼は、例えば、*Pamela* の改訂版を出す度に、強迫観念に取り付かれたかのように過去分詞形を変えていった (Percy: 2009: 121)。彼程に有名な小説家ですら、自身の文法に確信を持てなかったのだから、普通の人々の不安感はいかばかりであっただろう。

Percy (2009: 134) は、Greenwood の 1753 年版の *Essay* では、write の過去分詞として writ, wrote, written の三形式が使われていたと言う。そしてその wrote が Johnson (1747) や Harris (1751)、Johnson (1755)、Lowth (1762) によって非難されていたとも言っている。面白い事に、Tieken-Boon van Ostade (2011: 233) は、Lowth の私的な手紙の中に過去分詞としての wrote を 13 箇所、そのうち妻への手紙には 10 箇所あるのを発見している。18 世紀中盤まで、write の過去分詞の三形式は、同一人物の同一書の中でも特に区別されないままに使われることがあったり、時と場合によって使い分けられたりしていたということになる。現在の written は議論を通して正しい形として選ばれたもののものである。

そして、まだ標準英語が仕上がって行く途上にあった時代、他の様々な語句や表現についても様々な variants の中から一つが選ばれ、それが標準英語に織

<sup>10</sup> 面白いことに、Postlethwaite (1795) のタイトルは、THE GRAMMATICAL ART IMPROVED: IN WHICH THE ERRORS OF GRAMMARIANS AND LEXICOGRAPHERS ARE EXPOSED; TWELVE TENSES ARE EXPLAINED; AND, FOR THE EXERCISE OF LEARNERS, SUCH an APPENDIX is added, As contains an EXPLANATION OF many PARTICULARS needful to be known: となっている。

り込まれていったと思われる。だとすれば、同じ頃 *I am loving* を見聞きしてもとりたてて誤った表現と感じない人々と、*I am loving* は駄目だと言われればそうなのかと受容する人々がいて、後者の人々の認識が文法書やそれを使った教育に後押しされ、禁則が徐々に確固としたものになり、*I am loving* などの *stative progressive* が標準英語から消えていったということは考えられないだろうか。

#### 4. Pickbourn の *Stative Progressive* 禁則の特色

ここで、Pickbourn の (4) の規範記述のありかたに目を向けてみたい。まずは、(4) の禁則の主語、*we* である。この *we* は、英語を第二言語とする人々に対する英語を母国語とする話者を指しているのではない。文法書の筆者を含んでいるかどうかも判然とはしない。Watts (1999) に依れば、18世紀の英文法書では、この *we* というのは、基本的には上流階級の教養の高い ('polite' society に属する) 人々を指すという特殊な意味で使われていた代名詞だという。Watts (1999) は、基本的に1711年から1762年までの英文法書の話をしているが、禁則をこの意味での *we* を用いて始める慣習は、多くの文法書で19世紀後半まで続いている。Pickbourn の規範記述の主語には、まさにこの *we* が用いられている。前述したように、Brown (1823: 69) や Reed and Kellog (1880: 216) も、それぞれ *we say*, "I respect him;" but not "respecting him," *We say I love the child — not, I am loving the child* などという言い方をしている。

主語の *we* が誰であれ、元々誰も *stative progressive* を使わないのであれば、それを禁ずる必要はないように思える。これをわざわざ英語を母国語とする人々の為の文法書に記載しているのは、*I'm respecting* や *I'm loving child* が使われることがあり、それを正しくないとは是正する必要があったことを意味していると考えられるだろう。前述の Knowles (1796: 59) の *I love, not, I am loving; I know, not, I am knowing* も同類だろう。Bain (1863: 115) が *I was supposing* や

he is not intending を Scotticisms の例として挙げたのも、Scotland で用いられているけれども使わないように気を付けるべき表現と見なしたからではないかと思われる。こういった進行形の制限も、‘polite’ society に属したい、或は属し続けたい人々の為の規範の一端だったとも考えられる。

Pickbourn の記述を他の側面から見てみることも重要のようだ。前述の Michael (1987: 328-329) は、「言語を正しく使えるようになる為の唯一の方法は、自らの間違いを観察することで、自分の言語を正しく話し書けるようになりたい人は皆、言語を分析し、全ての統語規則のもと、間違った文法を正す練習を注意深く行わなければならない。そして誤りを誤りとして認識するだけでなく何故誤りなのかを知る必要がある」という Woodbridge (1800: 28) の言も引用している。即ち、文法書には、誤りを同定して是正するだけでなく、その理由も付されていることが求められていた。Pickbourn の禁則には、まさにその通り、間違いが呈示され、それが正され、そこに continued energy と affection of the mind を表す動詞は進行形では使えないから、という理由付けがなされている。この原則に習熟すれば、それが染み付いてその通りにしか進行形を使わなくなった可能性は考えられなくはない。

Beal (2004: 112-114) は、18世紀の英文法記述には論理志向性もあったと述べる。近代の様々なテキストでは、例えば、否定辞が重なる二重否定文や、二重比較級表現、non-emphatic Do (動詞の前に Do があっても特に強調の意味がない表現) 等が、実際に使われていることがある。それに対して、それぞれ「否定の否定は肯定になるので誤り (例えば、Murray (1795: 121))」と非難したり、「例えば、more fairer などのように、既に比較級の形容詞に more をつけるのは良くない英語 (Ann Fisher (1750: 79))」、「I do write といった形は、意味は単純形と同じだが、強調、否定、疑問の為に使う (Pickbourn (1789: 25-26) 等)」としたりする文法記述は随所に見られる。こういった感覚には、理屈に合わない

いものや、曖昧さ、余剰性を排除する合理性がある。標準英語にはそういった論理性と符合する側面が多々ある。

Pickbourn の禁則の理由も、彼の単純形と進行形の区別によって裏付けされており、それを論理的に詰めた説明になっている。或る動詞が、現代標準英語の進行形に使えるかどうかは、「変化が意識されるか、されないか」という厳格な二項対立 aspect 概念に支配されている。進行形になる動詞の表す「変化が意識される様」を認知するには、如何に瞬時に近くとも時の経過が必要である。それは始まって終わるものであり、進行形はその途中を表す構文である。始まって終わるという変化が意識されなければ、途中という概念も存在しない。こういった原理は、意識されることはなくても論理的感性に訴える。従って刷り込まれやすく、無意識の直観をも左右することにもなりやすいと思われる。それが揺るぎないものとなっても不自然ではない。

論理性は Pickbourn 自身の考え方も左右したかもしれない。彼は I am loving などとは決して言わないと明言しているが、序文から察するに、それは、当初は彼及び彼の観察範囲の人々の直観によるものではなかったかもしれない。彼が単純形と進行形との相違を追求するあまりに、理屈の上で、正当ではないように見えるようになった可能性もある。彼は、Lowth の I am loving は削除されるべきとするにあたり、自分の区別が正しければ、という但し書きを付している。この条件節からは、同文の非容認性がいわずもがなのことではなかった可能性も感じられる。英語の名誉の為には、単純形と進行形との相違を示すことが望ましかったのかもしれない。

現代標準英語の進行形に関する殆ど全ての文法書や学術書上の説明は、表現は違っても、Pickbourn (1789) に記されている原則と禁則の延長上にある。それは、書評家達や文法家達が筋の通った説明を歓迎した結果なのかもしれない。Pickbourn の進行形制限記述は、当時の文法書に求められた条件に見事に適合し

ている。文法書の執筆に必要とされていたもの、そしてその読者が文法書に求めてやまなかったものの一角を Pickbourn が提供した可能性もある。

## 5. 標準化と禁則

人々が禁則を求めていたとしても、文法書主導で禁則が一般化したかどうかはまた別の問題かもしれない。Beal (2004: 114) は、二重否定文や二重比較級は、当時既に少なくとも標準英語としては廃れつつあり、文法書は既に一般的になっていた現象を追従した面もあると言う。しかし、そうであったとしても、進行形の場合、I am loving を例文に挙げたり I am writing は I write のことだと説明したりする大御所的文法書が Pickbourn 以前にもその後も存在したことを考え合わせると、当時何を以て標準と受けとめられていたかは定かではない。

典型性が標準化に繋がっていた場合もあったであろう。単純形と進行形についても、その使われ方の違いに注目すれば、典型的用法としては、Pickbourn の (6a, 6b) に並んだ用法が観察されたのかもしれない。Pickbourn (1789) が書かれた当時、stative progressive は、存在したとしてもかなり周辺的か、或はグレーゾーンにあったかもしれない。Pickbourn はそういった意識に上りにくいグレーゾーンを切り捨てただけだったのかもしれない。白黒ははっきりしていた方が、文法家達達にとっても、学習者からみても、覚えなければならないルールとしては吸収しやすく重宝だっただろう。教育現場におけるルールの反復により、標準英語を使おうとする人々が stative progressive を文字化する事も口にすることもなくなれば、stative progressive が標準英語から一掃され、見聞することもなくなりうる。Pickbourn の禁則は、そういった形で浸透していった面もあるのかもしれない。

数の原理を重要視するならば、Pickbourn (1789) の影響を受けた様々な文法書著述が、更にそれらの読者に大きく影響を及ぼした可能性も考慮すべきだろ

う。Pickbourn (1789) の記述を明らかに模倣した箇所のある Bullions (1834) について、Görlach (1998: 72) は、「エジンバラで教育を受け当時の規範文法を吸収した文法家による、米国で最も読まれた書」と註釈を施している。Görlach のリストにおける同書の再版・改訂版数も32を超える。また Bullions は他にも七冊文法書を書いており、それも何度も増版されている。少なくとも間接的には Pickbourn の禁則を受け継いだと思われる Brown (1823) も、20回増版され、彼の他の六冊の文法書のうち二冊の再版・改訂版数も20回、24回を数える。禁則を記述している、前述の Butler (1845)、Kerl (1861)、Bain (1863) も、幾度となく再版されており、Görlach (1998) は Bain を19世紀で最も重要な文法書の一つとして挙げている。Görlach はまた、同じく前述の Reed and Kellog (1880) についても、この書がどれだけ人気を博していたかは発刊数で解ると述べている。Alston (1974, vol. i, 92-96) を参照すると、Murray の *English Grammar* は、英語版だけで、様々な数多くの都市で1871年の65版まで出版され、日本語を含む多くの他言語にも翻訳され、その簡約版も1954年迄再版に再版を重ねたことが解る。1799年の第五版で初めて Pickbourn について言及したその書は、後の版でも(4)の禁則を受け継いでいる。これらの文法書は、19世紀には、I am loving を掲げる Lowth (1762) や単純形と進行形を variants とする Cobbett (1818) を、数で遥かにしのぐ圧倒的大多数派を占め、そのことによって(4)の禁則が標準英語の文法規範の中で支配的になっていった可能性はないとは言えないだろう。

Pickbourn の書自体も、文法家達だけでなく、一般の人々にも読まれた可能性がある。Auer (2008: 72) は、Pickbourn (1789) が、1796年の本のカタログに、Norwich の公立図書館の唯一の所蔵文法書として掲載されていることに触れている。彼女はそれを意外な事だと言っているが、案外そうでもなかったかもしれない。同書は、12×13cm程の頁に21行程という、他の文法書にはあまりみられない大きなフォント、かつ平易な文章で解りやすく書かれている<sup>11</sup>。Greenwood

(1711) や Ann Fisher (1750)、Knowles (1796)、Angus (1839) などは、より小さな本の一頁に40~42行程、註になると更に蟻のように小さなフォントで書かれており、それらの書に比べると段違いに読みやすい。Pickbourn 自身についての情報は殆どないが、書評では master at boarding school of Hackney と紹介されている。Hackney は London の中心部に位置する地域であるので、そこで出版されたとすれば、他の地域にも広がった可能性はある。発行部数は不明であるものの、地方の公立図書館に所蔵されていたのであれば、部数は少なくはなかったであろう。

近代後期は、進行形自体が使用頻度・用法共に目覚ましく拡大した時期でもある。Beal (2004: 78) は、近代後期の統語構造の中で最も華々しい変貌を遂げたのは進行形だろうとさえ言っている。主に口語で用いられていた進行形は、この時期時の経過と共に、文献上の出現頻度が際立って高くなった。その要因としては、informal なやり取りも多く文字化されるようになったことや、進行形自体が informal な文脈でなくても使われる様になったことなども含まれるだろう。また、そこには、近代前期までは、まだまだ単純形で進行の意味も表していたのが、進行形がその役割を担うようになったことも大きく関わっているだろう。Jane Austen は他に先駆けて進行形を駆使した小説家として有名だが、それはつまり、19世紀初頭までの他の小説家は、進行の意味を表すのに殆んど単純形を使っていたことになる。同じ意味機能を持つ表現は、通常どちらかが衰退するが、進行形は勢いを増すばかりであり、単純形は英語の中の最も基本的な形式である。両者は、拮抗した後徐々に単純形が「進行の意味を担う役割」を進行形に明け渡し、英語の二大基本構文として役割分担を始めた。そうした中で混沌とした過渡期がしばらく続いたのが近代後期だったのかもしれない。

---

<sup>11</sup> 但し、Lowth (1762) は Pickbourn (1789) とほぼ同じ大きさの本で行数は23行。

まだ未分化で曖昧だったその役割分担のあり方をいち早く明解に整理し、詳細に文字化したのが Pickbourn (1789) であったのかもしれない。しかし、禁則の方は、二形式の識別に付随して着想されたものかもしれない。stative progressive が、かなりの少数派であったとしても、現に19世紀初頭の書簡等で使われていた事、単純形との対照における進行形に関する記述が文法書によって異なったこと、Pickbourn 自身の序文などからすると、Pickbourn (1789) が世に出るまで、stative progressive の I am knowing を言下に容認不可とする感覚までは、多数の母国語話者に顕在化してはいなかった可能性はある。

18～19世紀は、まだまだ進行形の扱いに関しては、標準が確立していたとは言えず、19世紀を通して共通認識が定まりつつあった段階にあったと言えるだろう<sup>12</sup>。言語の標準化というのは variants から一つが選択されるということであるから、stative progressive の容認性について様々な variants があったとすれば、その一つが容認しないというものだったかもしれない。Pickbourn (1789) は書評で評価され、文法家達の目に留まり、同書に何らかの形で影響を受けた文法書が数多く出版された。進行形の制限は、同書の三カ所で言及されている。それが単純形と進行形の明解な用法の区別を支え、文法書における規律として、一定の人々に受け入れられたということもほぼ間違いないだろう。

ともあれ、Pickbourn の専門書は、文法書の発刊数が爆発的に増え始め、標準英語が仕上げの段階に入る時代の真只中で出版された。それは、人々が文法書の示す指針にすがって言葉の使い方に留意し、禁則が切望されていた時代、進行形も激動の時代でもあった。進行形はなんと言っても英語の基盤構文である。少々単純すぎる図式かもしれないが、そういった時代が stative progressive 禁則の浸透を促進したとすれば、制限は正しい英語体系の中に組み込まれ、無

---

<sup>12</sup> 例えば、19世紀は、The house is (a) building が論争の末 The house is being built へと変化した時期でもある。

数の人々の脳裏に叩き込まれて、直観に植え付けられていったかもしれない。力強い禁則が、人々の進行形の使い方を支配するようになったかもしれない。

## 6. 文法規範と使用実態

但し、歴史言語学や社会言語学の研究者達は、一般的に、文法書に書いてある事が実際に人々の言葉遣いに影響をもたらしたという見方には、昨今かなり懐疑的か否定的である。言語現象を文法書が記述する事はあっても、人々の言葉遣いが文法記述などに左右されるなどという事は考えにくいという訳である。規範文法が実際の言語使用や変化に直接的な影響をもたらしたかどうかを検証するのは困難である。様々な文法項目に関して、文法記述の影響をコーパスなどで調べる試みがいくつかなされて来たが、数値として明確に出す事は難しいようだ。Auer and Gonzalez-Diaz (2005) や Bax (2008) は、接続法や二重比較級、比較級・最上級に関する現象を通して、文法規範が近代英語に変化をもたらした可能性を巡る議論を展開する。だが、規範文法は、要因の一つに過ぎないか、既に進行していた現象を後押しするレベルの要因とするにとどまる。

しかしながら、van Geldern (2005: 7-9) は、規範が実際の言葉の使い方に影響を及ぼしていると考えられる現代の現象を幾つも例示している。例えば、彼女の理論で行けば、関係代名詞は、*wh*-pronoun から *that* へと自然に集約・変遷して行く筈で、現に実際の話し言葉では、*that* が *wh*-pronoun より遥かに優勢である。それが書き言葉では逆になっている。彼女はその要因として大学などで *that* を避けるように奨励されていることを挙げ、規範が自然な変化の妨げとなっていると言う。日本語の場合も、既に使われている表現が、メディアで誤りなどと指摘されると、若者たちの使用頻度が実際に減少するというデータはよく見られる。社会で損をしない言葉遣いを身につけたいというのは、今も昔も何処でも同じ事ではないだろうか。少なくとも書き言葉では、身につけた習いに

従って言葉を使おうとしていくだらう。近代後期の上昇志向の人々では尚更その傾向は強かった筈だ。明確な禁則があれば、使わないように気をつける事ができる。標準英語で使う人が少なくなれば、標準英語では見聞きしなくなり、aspectual な識別は論理性にも訴えるので、意識下でも stative progressive が排除され得る。であれば、Pickbourn の言う禁則が標準英語に浸透し、揺るぎのないものになっていったことは想像に難くない。

実際に使用されていたかどうかについても、何を以て実際に使われていたことになるかも議論の難しいところだろう。stative progressive は19世紀の様々なジャンルを扱ったコーパスでも殆ど見られないが、それはもともと極度の少数派であったことに加えて、文字化される事が極端に少ない部類に入っていたからかもしれない。方言となってしまった variants に含まれていたかもしれない。その上、stative progressive は文脈を読み込まなければそうでないものとの区別が難しい。stative progressive であったとしても、動きを読み取って解釈してしまうこともあるだろう。白黒がはっきりしない場合もあるだろう。I'm lovin' it は、発話時点の動作を喚起する面もあるかもしれないが、それだけにとどまらない微妙な部分があるからこそ、眉をひそめる人々がいるのだと思われる。規範の影響によって stative progressive が制限されるようになったかどうかを立証するのは難しいが、逆に影響が全くなかったとも言えないだろう。

## 7. 進行形の現在分詞

進行形の制限には他にも不思議な点がある。現在分詞自体には、(11)に見られるように、変化を表していない動詞が使われる場合もあることだ。

(11) Not knowing what to say, she stood there speechless.

即ち、現在分詞そのものには aspectual な制限はない。Singing merrily, they walked along the path のような付帯状況を表す分詞構文の現在分詞は、意味的には進行形の現在分詞にかなり近い。(11) の現在分詞も同様である。勿論、構文の特性というのは、一般にその構成素の単なる足し算ではない。しかしそれでも、現在進行形の現在分詞だけにアスペクト制限がかかる理由を説明するのは難しく、未だ解明されてはいない。それ以外の現在分詞に制限がないのは、制限が、進行形と単純形が比較対照された結果として、付随的に生じたものだからだと考えると、些少ではあるが納得感がある。

## 終わりに

本稿では、stative progressive が現代標準英語では容認されない理由を追求し、それが近代後期の英文法書記述、特に Pickbourn (1789) と深く関わっている可能性を示唆した。現代標準英語では、という但し書きがついて、He is knowing が誤りというのであれば、英語の標準化と進行形の制限とが無関係とは言えないであろう。Pickbourn (1789) に書かれている禁則が世に出て多くの人々の目にとまり、英語の標準化のうねりに乗って stative progressive を容認できない感覚が広まったのが19世紀であるならば、19世紀初頭の小説や書簡で stative progressive が見られても全く不自然ではない。方言の進行形に制限がない場合があることもしかりである。I am loving が例文として使われた文法書が存在するのは、Pickbourn (1789) の当該記述の影響を受けていない文法家達にとって、特に抵抗のない表現だったからだという可能性はあるだろう。自然なままの言語は、語彙的にも統語的にも際限なくバラエティに富み、一様ではない。そこには、A と  $\bar{A}$  というように割り切ることはできない部分もある。標準語というのは、そうした言語の複雑さを、或る意味人為的に切り捨て、或る程度画一的なものとして単純化し固定化した枠の中に閉じ込め、習得や、より精緻正確な

意思疎通と情報共有を、より容易にする道具であり、様々な意味で利便性が高い。Stative progressive の制限規則は、現代標準英語に (2a, b) のような微妙なニュアンスを持った進行形をもたらし、かつ、多様な英語の stative progressive と共存しているとみていだろう。

Pickbourn (1789) 以前の主要文法書には stative progressive を制限する記述がなく、制限は少なくとも Pickbourn 独自のものである可能性が高く、制限を裏付ける彼の進行形と単純形の記述にもそれまでには見られない明確さがある。かつ、以後の文法書にはその記述を踏襲したものが多く見られる。それを取り巻く時代背景などの様々な状況からすると、進行形の制限は、Pickbourn (1789) に端を發し、その影響を受けた英文法書の更なる圧倒的影響力によって標準英語に浸透した可能性はある。勿論、それは単に可能性に過ぎない。Pickbourn は、名も知られていない先人の見解または実態を明文化しただけなのかもしれない。しかし、彼の序文を考慮に入れ、書評や前後の文法書を当てる限りでは、Pickbourn (1789) は、禁則が広まる現象において、少なくとも核心をなす書と言えそうである。仮に Lowth が、実際には存在しない、創作した例文を自分の英文法書で使ったというのであれば、制限の方も人為的に生まれ出た可能性もあるだろう。

## Reference

### Primary Sources

Angus, William (1839) *English Grammar*, (The Fifth Edition, First published in 1825), Glasgow: (Printed for) the Author.

Bain, Alexander (1863) *An English Grammar*, London: Longmans Green & Co.

Barrett, Solomon 1837 *The Principles of Language: Containing a Full Grammatical Analysis of ...*, Albany: O. Steele.

- Bidlake, John Purdue (1863) *A New English Grammar, Comprising the Substance of Lennie's Principles of English Grammar*, London: T. J. Allman.
- Brittain, Lewis (1788) *Rudiments of English Grammar*, Louvain: L. J. Urban.
- Brown, Goold (1823) *The Institutes of English Grammar*, Scholars' Facsimiles and Reprints (1982), New York: Delmar.
- Buchanan, James (1762) *The British Grammar*; rpt. Menston: Scolar Press (1968).
- Bullions, Peter (1834) *The Principles of English Grammar*, New York: Clement and Packard.
- Butler, Noble (1879) *A Practical Grammar of the English Language*, (American School Series), Louisville: John P. Morton and Company (First published in 1845, Louisville: Morton & Griswold).
- Burr, Jonathan (1797) *A Compendium of English Grammar*, Boston: Samuel Hall.
- Cobbett, William (1818) *A Grammar of the English Language*, New York: (Printed for) the Author by Clayton and England.
- Devis, Ellin (1801) *The Accidence; or First Rudiments of English Grammar*, (The Tenth Edition), London: C. Law. On line google com. (The Eighth Edition printed in 1775, on ECCO).
- Fisher, Ann (1750) *A New Grammar, with Exercises of Bad English, Or, an Essay Guide to Speaking and Writing the English Language Properly and Correctly*, London: (Printed for) the Author.
- Fowler, William Chancy (1851) *English Grammar*, New York: Harper & Brothers (First Published in 1850, New York: Harper & Brothers).
- Greenwood, James (1711) *An Essay Towards a Practical English Grammar*; rpt. Menston: Scolar Press (1981).
- Harris, James (1751) *Hermes, or A Philosophical Inquiry Concerning Language and*

*Universal Grammar*, London: J. Collingwood.

Johnson, Samuel (1747) *The Plan of a Dictionary of the English Language; Addressed to the Right Honourable Philip Dormer, Earl of Chesterfield*, London: J. and P. Knapton et. al.

Johnson, Samuel (1755) *A Dictionary of the English Language*, London: J. and P. Knapton et. al.

Kerl, Simon (1868) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, New York: Ivison, Phinney, Blackman & Co. (First published in 1861).

Knowles, John (1796) *The Principles of English Grammar with Critical Remarks and Exercise of False Construction*, London: (Printed for) the Author.

Lennie, William (1866) *The Principles of English Grammar*, Montreal: John Lovell (First printed in 1810).

Lowth, Robert (1762) *A Short Introduction to English Grammar*; rpt. Menston: Scolar Press (1967).

Miege, Guy (1688) *The English Grammar; or the Grounds, and Genius of the English Tongue*, London: (Printed by F. Redmayne, for) the Author.

Murray, Lindley (1795) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners*; rpt. Menston: Scolar Press (1968).

Murray, Lindley (1797) *English Exercises Adapted to the Grammar Lately Published by L. Murray*, York: Wilson, Spence, and Mawman.

Murray, Lindlay (1809) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners*, (The 16<sup>th</sup> Edition), New York: Collins and Perkins.

Pickbourn, James (1789) *A Dissertation on the English Verb*, ; rpt. Menston: Scolar Press (1968).

Postlethwaite, Richard (1795) *Grammatical Art Improved*, London: J. Parsons.

- Reed, Alonzo & Brainerd Kellogg (1880) *Higher Lessons in English*, New York: Clark & Maynard (First published in 1877?).
- Swett, Josiah (1844) *Swett's Grammar: An English Grammar*, Windsor Vt: J. Swett (The first edition appears to have been published in 1843).
- Ward, John (1758) *Four Essays upon the English Language*: rpt. Menston: Scolar Press (1967).
- Ward, William (1765) *An Essay on Grammar*; rpt. Menston: Scolar Press (1969).
- Webster, Noah (1789) *Dissertation on the English Language: with Notes ...*, Boston: (Printed by Isaiah Thomas and Company for) the Author.
- Weld, Allen H. (1848) *Weld's English Grammar*, Portland: Sanborn & Carter. (First printed in 1845?).
- Whitney, William Dwight (1886) *Essentials of English Grammar for the Use of Schools*, Boston: Ginn & Co. (First published in 1877, London: Henry S. King).
- Woodbridge, William (1800) *A Plain and Concise Grammar of the English Language; Containing Large Exercise of Parsing and Incorrect English*, Middleton, Connecticut: T. & J. B. Dunning.

### Secondary Sources

- Alston, R. C. (1974) *A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800* (A Corrected Reprint of Volumes I-X Reproduced from the Author's Annotated Copy with Corrections and Additions to 1973. Including Cumulative Indices), Ilkley: Janus Press.
- Auer, Anita and Victorina González-Díaz (2005) "Eighteenth-Century Prescriptivism in English: A Re-evaluation of its Effects on Actual Language Usage," *Multilingua* 24, 317-341.

- Auer, Anita (2008) "Eighteenth-Century Grammars and Book Catalogues," in *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing Eighteenth-Century England*, ed. by Ingrid Tieken-Boon van Ostade, 57-100.
- 板東洋子 (2008) 「Jane Austen の作品中における進行形：動詞タイプの考察」  
近代英語協会 第25回大会ハンドアウト.
- Bax, Randy Cliffort (2008) "*Foolish, foolisher, foolist*: Eighteenth-century English Grammars and the Comparison of Adjectives and Adverbs," *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing in Eighteenth-Century England*, ed. by Ingrid Tieken-Boon van Ostade, 279-288.
- Beal, Joan (2004) *English in Modern Times 1700-1945*, London: Oxford University Press.
- Hirtle, Walter H. and Claude Bégin (1991) "Can the Progressive Express a State?," *Langues et Linguistique: Travaux du Département de langues et linguistique* 17, 99-137.
- Nehls, Dietrich (1988) "On the Development of the Grammatical Category of Verbal Aspect in English," in *Essays on the English Language and Applied Linguistics on the Occasion of Gerhard Nickel's 60<sup>th</sup> Birthday*, eds. by Klegraf, J and D. Nehls, 173-198, Heidelberg: Julius Groos Verlag.
- Gelderen, van Elly (2005) "Economy against Prescriptivism: Internal and External Factors of Language Change," June, 2005 version [www.public.asu.edu/~gelderen/LASSO-prez.pdf](http://www.public.asu.edu/~gelderen/LASSO-prez.pdf).
- González-Díaz, Victorina (2008) "On Normative Grammarians and the Double Marking of Degree," in *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing in Eighteenth-Century England*, ed. by Ingrid Tieken-Boon van Ostade, 289-310.
- Görlach, Manfred (1998) *An Annotated Bibliography of Nineteenth-Century*

- Grammars of English*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Görlach, Manfred (2003) "A New Text Type: Exercises in Bad English," available online at [faculty.education.illinois.edu/westbury/.../golach.rtf](http://faculty.education.illinois.edu/westbury/.../golach.rtf).
- Michael, Ian (1987) *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mittwoch, Anita (1988) "Aspects of English Aspect: On the Interaction of Perfect, Progressive and Durational Phrases," *Linguistics and Philosophy* 11, 203-254.
- Osselton, Noel E. (1980) "Points of Modern English Syntax," *English Studies* 61, 454.
- Percy, Carol (2004) "Consumers of Correctness: Men, Women, and Language in Eighteenth-century Classified Advertisements," in *New Perspectives on English Historical Linguistics: selected papers from 12 ICEHL, Glasgow, 21-26 August 2002. Volume I: Syntax and morphology*, eds. by Christian Kay, Simon Horobin, and Jeremy Smith, *Current Issues in Linguistic Theory* 251, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 153-176.
- Percy, Carol (2008) "Mid-century Grammars and their Reception in the *Monthly Review* and the *Critical Review*," in *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing in Eighteenth-Century England*, ed. by Tiekens-Boon van Ostade, Ingrid, 125-142, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Percy, Carol (2009) "Periodical Reviews and the Rise of Prescriptivism: The *Monthly* (1749-1844) and *Critical Review* (1765-1817) in the Eighteenth-Century," in *Current Issues and Late Modern English*, eds. by Tiekens-Boon van Ostade and van der Wur'ff, Bern: Peter Lang, 117-150.
- Rothwell, James (1797) *A Comprehensive Grammar of the English Language, for the Use of Youth*, London: Wigan P. L.
- Sundby, Bertil (1979) "John Knowles on English Usage and Style," *English Studies*

Volume 60, Issue 2, 111-121.

Tieken-Boon van Ostade, Ingrid (2006) “Eighteenth-century Prescriptivism and the Norm of Correctness,” in *The Handbook of the History of English*, eds. by Ans van Kemenade and Bettelou Los, Oxford: Blackwell, 539-557.

Tieken-Boon van Ostade, Ingrid (2011) *The Bishop’s Grammar: Robert Lowth and the Rise of Prescriptivism*, Oxford: Oxford University Press.

Watts, Richard J. (1999) “The Social Construction of Standard English: Grammar writers as a ‘Discourse Community’,” in *Standard English: The Widening Debate* eds. by Bax, Tony and Richard J. Watts, Routledge: London and New York.

Wischer, Ilse (2003) “The Treatment of Aspect Distinctions in Eighteenth and Nineteenth-century Grammars of English,” in *Insights into Late Modern English*, eds. by Marina Dossena and Charles Jones, Bern & Berlin: Peter Lang.